

子どもが実感する貧困と教育アスピレーションへの影響

福永 知久

要 旨

現在、日本において社会格差や貧困層の拡大が社会的に問題視されている。特に子どもの貧困は緊急度が高く、貧困のスパイラルから抜け出せない要因の一つとなっている。先行研究から、子どもの貧困は経済的な貧困よりも、親が子どもの「教育アスピレーション」を育てられない点に原因があると考えられる。そこで本研究では、小学校5年生、中学2年生の児童とその保護者を対象として実施されたアンケート調査の回答を用いて「実際の貧困経験」や「貧困感」に着目し、教育アスピレーションへの影響について解析を行った。その結果、教育アスピレーションに対して所得基準の貧困（内閣府定義）は有意な影響を認めなかった一方、「医療機関への未受診」は、有意に教育アスピレーションを低下させた。また、「自己肯定感」は教育アスピレーションに対し有意な関連性を認め、貧困群における「自己肯定感」に寄与する要因として「大人への信頼度」が深く関連していた。

小学生・中学生の子どもにとって「医療機関への未受診」は、教育アスピレーションに直接影響するエピソードであり、子どもの貧困対策として「十分な医療環境の整備」と「受けられる医療サービスの周知」が有力な手立てであることを示唆した。更に、教育アスピレーション向上に対し、貧困に悩む児童の悩み解決の場や、相談しやすい社会状況の整備が重要であると考えられる。

キーワード：子どもの貧困、教育アスピレーション、子どもの自己肯定感、貧困対策

I. はじめに

現在、日本の相対的貧困率は15.6%と報告されており^{1,2)}、これは国際的にも高い水準で、社会格差や貧困層の拡大が社会的な問題となっている。とりわけ子どもの貧困は、身体的・精神的・社会的な子どもの成長発達に影響を及ぼすだけではなく、健康格差や学力格差、児童虐待のリスク要因にもなることが明らかにされており³⁾、その後の人生に大きく影響するため、近年の日本ではEU同様に「子どもの貧困」も問題視されている。日本における子どもの相対的貧困率に注目すると、2012年まで増加を続け、ピーク時には16.3%を記録した。それ以降は改善傾向を認めているが、OECDに加盟している先進国と比べて同程度から若干高い割合で推移している²⁾。自治体を対象とした実態調査においても、年収359万円以下の世帯収入が低い世帯では衣食住のほか、子どものための支出や学習環境への支出を節制している実情が報告されている³⁾。こうした貧困の連鎖を断ち切る取り組みの指針として、2013年6月26日に貧困の状況にある子どもが健やかに成長できる環境整備に加えて教育の機会均等を推進することが記述された「子どもの貧困対策の推進に関する法律」が公布された。同法律が公布後、

各自治体では子どもの貧困対策計画が策定され、特別区を含め全国847市町村で取り組みがされている（内閣府、2021年6月30日調査）。一方、依然として、我が国における子どもの貧困実態は「見えにくく、捉えづらい」とされており、支援が行き届いていない子ども・家庭に配慮して対策を推進することや、福祉や教育等の取組の過程で得られた個別の子どもの状況に関する情報を活用して、支援を要する子どもを広く把握し、効果的な支援につなげていくことの必要性が訴えられている⁴⁾。

貧困による格差が更なる貧困を引き起こす「貧困の連鎖」については、国内外を通じて子どもの貧困と教育に関する研究が広く実施されており^{5,6)}、日本でも貧困の連鎖を裏付ける先行研究が多く報告されている。例えば、生活保護の母子家庭のうち母の学歴が中卒である家庭が54.7%を占め、その子どもの高校中退率は28.8%であるとする報告がある⁷⁾。貧困の連鎖下にある子どもの就職率が低くなる傾向も明らかとなっている⁸⁾。これらの報告では貧困に伴う教育格差が子どもの理想学歴、即ち「教育アスピレーション」の低迷を引き起こしていると考えられている。また、教育アスピレーションに対して「家庭の経済状況、貧困」や「親の学歴」が大きな要因を占めていることを示唆する先行研究も多数存在する⁹⁻¹¹⁾。ただし、「教

育アスピレーション」を目的変数、「児の性別」、「居住時」、「成績」、「貧困」と「親の学歴」や「親の期待学歴」を説明変数とする多変量モデル解析では、「貧困」は間接的な影響は有するものの、直接的な影響は限定的であると報告されている¹¹⁾。

以上を踏まえると、現段階では子どもの貧困が教育アスピレーションと関係していると考えられているものの、その直接的な因子は明らかになっていないことが分かる。その原因の一旦は、これらの研究では大多数が間接的な影響とされている経済的な貧困をベースとして設計されており、教育アスピレーションへの直接的な影響因子を分析することができない点にある。一部については多変量モデル解析によって明かされているが、あくまで家庭環境との連動性を確認している研究であるため、他の因子が見落とされている可能性がある。

そこで本研究では、子どもの貧困が経済的な貧困よりも、親が子どもの教育アスピレーション育てられない点に直接的原因があると仮定し、具体的な貧困経験エピソードから教育アスピレーションに直接影響があると考えられる因子を発掘する。ここでの貧困経験エピソードは、実体験としての経験を重視しており、これまでの周囲との大人との関わりや自己評価などについてのアンケート結果を用いる。さらに、親側の問題・視点のみではなく、子どもの視点に立った影響要因の探索も試みる。具体的には、中核市（人口20万人以上で都市の規模や能力などが比較的大きな都市）の自治体に協力を仰ぎ、小学校5年生、中学2年生の児童とその保護者を対象として実施された子どもの生活に関するアンケート調査の回答から、貧困経験エピソードに関連する設問として「実際の貧困経験（食事・衣服が買えない、公共料金の未払い、医療機関への未受診）」と「貧困感」に着目する。子どもの学習習慣や、心理状況（自己肯定感、大人への信頼度、将来の夢や目標、現在の頑張る気力）等の影響も検討し、子どもに直接的な学習支援を提供できるポイントも記述する。

II. 研究方法

1. 対象及び調査方法

2017年7月に中核市（人口20万人以上で都市の規模や能力などが比較的大きな都市）の自治体にて、小学校5年生5,600名、小学校5年生の保護者5,600名、中学校2年生5,279名、中学校2年生保護者5,279名を対象に、「子どもの生活に関するアンケート調査」を実施した。アンケート調査は、いずれも選択式で、設問数は小学生・中学生向けアンケートが31項目、保護者向けアンケートが40項目であった。アンケー

ト調査を実施する際は、アンケート調査の目的や方法、協力の可否が今後の学校生活に一切影響がないこと等について学校を通して対象者全員に文書及び口頭で説明した。また、心理的なバイアスによる調査結果の歪みを軽減するため、匿名にて扱った。調査研究への参加同意判定は、回答用紙の提出をもって行われた。解析は、有効回答が得られなかった回答、本研究の主要評価項目である教育アスピレーション及び主要な曝露要因である貧困に関連する回答が得られなかったものを除外して実施した。

2. 倫理的配慮

アンケート調査は自治体によって研究対象への説明と実施がなされ、個人が特定されないよう自記式無記名方式で行われた。同意が得られて回収した質問紙及び集計データは個人情報の漏えいがないよう、自治体の管理の元で保管がなされていた。また、本研究に先立ち、横浜国立大学の「人を対象とする医学系研究倫理専門委員会」および「人を対象とする非医学系研究倫理専門委員会」において倫理審査の必要性を判断し、研究者がデータを分析する際、個人情報を完全に取り除き、いかなる手段によっても対象者が特定できない状態のデータとして管理保管することで、倫理審査申請不要の要件が満たされた。なお本研究実施の際は、ヘルシンキ宣言を遵守して進行した。

3. 評価項目

本研究目的を検証するため、アンケート回答項目を用いて下記のとおり評価項目を設定した。

主要評価項目：教育アスピレーション

教育アスピレーションの指標として、児童への問12：「あなたは、将来どの学校まで行きたいと思いますか」に対する設問を用いる。この時、「大学・大学院」との回答を1、それ以外の回答（中学校、高校、専門学校、わからない）を0として2値変数化し、教育アスピレーション変数とした¹¹⁾。

影響因子：「相対的貧困の有無（後述「貧困の定義」参照）」、「保護者への問9：実際の貧困経験（食事を買えない、衣服を買えない、公共料金の未払い、医療機関への未受診）」、「保護者への問10：貧困感（暮らしの状況が大変苦しいorそれ以外）」、「児童への問10：子どもの学習習慣（勉強時間）」、「児童への問15-1：自己肯定感」、「児童への問15-2：大人への信頼度」、「児童への問15-3：将来の夢や目標」、「児童への問15-4：現在の頑張る気力」について教育アスピレーションへの影響を検討した。

交絡因子：先行研究^{5,11)}にて影響が報告されている間接的な要因を含めて、「学年：小学生、中学生」、「保護者への問2：ひとり親世帯ですか：「はい、いいえ」、「保護者への問4：親の学歴：両親共に大卒以上、片

方の親のみが大卒以上、両方の親が大卒未満、その他、答えたくない」、「保護者への問4:子どもの健康状態:良い・どちらかといえば良い、普通、どちらかといえば良くない・良くない」、「保護者への問12:親の子どもへの進学希望:中学校・高校、短期大学、大学・大学院、専門学校・高等専門学校、わからない」、「児童への問11:子どもの勉強理解度(成績の代用):よくわかる、だいたいわかる、あまりわからない、わからない」を本研究における交絡要因とした。

4. 貧困の定義

厚生労働省が公表している相対的貧困率の算出方法に従い、等価可処分所得(世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得)の中央値の半分(貧困線)に満たない世帯を「相対的貧困層」と定義する。この時、本調査では世帯収入についての回答のみを得ているため、貧困線に対応する税込の世帯収入を概算した上で、相対的貧困層となる区分を選定した。まず、2010年度国民生活基礎調査における所得五分位階級ごとに、平均可処分所得に対する平均所得の比の値となる係数を算出した。次に、世帯人数別に貧困線を算出し、それぞれに対応する上記の係数を乗じることで、それぞれの貧困線の値に対応する世帯収入を概算し、この世帯収入を下回る回答者からなる集計区分を本庁さにおける相対的貧困層とした。なお、この手法は同省の相対的貧困層に関する調査にも利用されている¹²⁾。

5. 統計解析

アンケートより得られたデータに対して、各設問への回答数とその回答割合を算出した。回答割合は解析対象全体に対する割合(%)である。主要評価項目に対してロジスティック回帰モデルを構築し、交絡要因を調整因子として影響因子を評価した。この時、影響因子間には互いに相関があり共線性の問題が発生するため、単一の影響因子に対し交絡要因を独立変数として含める多変量解析モデルを構築し、各影響因子の交絡要因調整下での主要評価項目への関連性を検討した。よって、多変量解析は影響因子の項目数だけ構築された。回答内容に対する2群間比較において名義尺度項目にFisher's exact testを用いた。全ての検定において有意水準を両側5%と設定した。統計解析は、SPSS ver23.0 (IBM Japan, Ltd., Tokyo, Japan) により行った。

III. 結 果

1. アンケート回答者の背景

本研究におけるアンケートの有効回答数(有効回収率)は、小学校5年生4,827通(86.2%)、小学校5年生の保護者4,855通(86.7%)、中学校2年生4,362

通(82.3%)、中学校2年生保護者4,448通(84.0%)であった。主要な回答項目が得られなかった回答を除外し、7,815通を解析対象とした(表1)。

保護者調査の問2(1)世帯人数、及び問3(1)世帯収入の回答より等価世帯所得が算出された7,815世帯において、相対的貧困層は1,587世帯(20.3%)、非相対的貧困層は6,228世帯(79.7%)であった。児童への設問12「将来、行きたい学校」において、教育アスピレーションが高い児童(大学・大学院希望)は、3,794名(48.5%)であった。その他、本研究における評価項目における統計量は表1に示す通りである。

2. 教育アスピレーションに影響を与える因子

児童の教育アスピレーションに対して、貧困が与える影響を検討するためにロジスティック回帰分析を行った結果を表2に示す。学年、ひとり親世帯、親の学歴、親の子どもへの進学希望、子どもの勉強理解度、子どもの健康状態といった交絡因子の補正を適用したところ、相対的貧困の有無が及ぼす影響は有意ではなかった($OR=0.926$ [95%CI:0.780, 1.098], $P=0.375$)。一方、「实际的な貧困経験」と関係していると考えられる「医療機関への未受診」は、教育アスピレーションの低下との有意な相関が認められた($OR=0.790$ [0.633-0.985], $P=0.037$)。その他の貧困経験(食糧、衣服を買えなかった、電気・ガス・水道料金の未払い、家賃・ローン未払い)や、貧困感(暮らしの状況が大変苦しいorそれ以外)では、教育アスピレーションとの相関は有意ではなかった。

さらに、児童への設問における回答にて、学習時間が教育アスピレーションに対して有意な相関を有する結果となった(学習時間を全くとらない: $OR=0.514$ [0.318, 0.830], $P=0.006$; 30分より少ない: $OR=0.565$ [0.423, 0.754], $P<0.001$; 30分~1時間: $OR=0.729$ [0.626, 0.849], $P<0.001$ [vs. 1~2時間(参照基準)])。

また、自己肯定感も教育アスピレーションに対して有意な相関を認めており、自己肯定感の低下に伴って教育アスピレーションは低下した(自分のことが好きではない: $OR=0.762$ [0.599, 0.969], $P=0.027$; どちらかといえば好きではない: $OR=0.808$ [0.675, 0.967], $P=0.020$ [vs. 自分のことが好きである])。加えて、現在の頑張る気力が低くなると、教育アスピレーションの低下を認めた(頑張りたいと思わない: $OR=0.428$ [0.293, 0.625], $P<0.001$; [vs. 頑張りたいと思う(参照基準)])。一方、大人への信頼度の高さも、教育アスピレーションと相関していることを確認した(信頼できない: $OR=0.743$ [0.553, 1.000], $P=0.049$; どちらかといえば信頼できない: $OR=0.744$ [0.607, 0.912], $P=0.004$; どちらかと言えば信頼できる: $OR=0.848$ [0.742, 0.969], $P<0.001$; [vs. 信頼

できる（参照基準）]]。

3. 自己肯定感と関連する要因の検討

相対貧困群において、「自己肯定感」と関連する要因を、肯定的群（「好きである」または「どちらかといえば好きである」）と否定的群（「好きではない」または「どちらかといえば好きではない」）に分割して比較したところ、自己肯定感に寄与する要因として「大人への信頼度」との関連が認められた（否定的群：大人が信用できる 16.9%，肯定的群：43.0%， $P<0.001$ ）

（表3）。さらに、悩みを持っているという回答頻度の影響も有意であり（否定的群：47.4%，肯定的群：27.1%， $P<0.001$ ），「学校や勉強のこと（62.7%）」，「自分のこと（33.5%）」の悩みが多かった（ $P<0.05$ ）。悩みを相談する相手については、肯定感が高い群では「家族の大人」や「学校の先生」を選択する率が高いが、否定的な群では「特にない」「相談したくない」の回答率が有意に高かった（ $P<0.05$ ）。

表 1. アンケート回答者の背景

保護者への設問			児童への設問		
設問	有効回答	Data	設問	有効回答	Data
問b 貧困2 内閣府	7815		学年	7815	
非相対的貧困		6228 , 79.7	小学校5年生		4093 , 52.4
相対的貧困		1587 , 20.3	中学2年生		3722 , 47.6
問2-1 世帯員総数	7815		問10 普段の勉強時間	7815	
2人		184 , 2.4	全くしない		153 , 2.0
3人		1076 , 13.8	30分より少ない		400 , 5.1
4人		3496 , 44.7	30分以上、1時間より少ない		1728 , 22.1
5人		2307 , 29.5	1時間以上、2時間より少ない		3439 , 44.0
6人		582 , 7.4	2時間以上、3時間よりは少ない		1517 , 19.4
7人		121 , 1.5	3時間以上		578 , 7.4
8人		35 , 0.4	問11 学校の勉強の理解度	7815	
9人以上		14 , 0.2	よくわかる		2257 , 28.9
問2-3 ひとり親世帯か	7815		だいたいわかる		4602 , 58.9
はい		1022 , 13.1	あまりわからない		811 , 10.4
いいえ		6793 , 86.9	ほとんどわからない		145 , 1.9
問3-1 世帯の収入	7815		問12 将来、行きたい学校	7815	
50万円未満		94 , 1.2	中学校		62 , 0.8
50～100万円未満		226 , 2.9	高校		1407 , 18.0
100～150万円未満		331 , 4.2	大学（短期大学含む）・大学院		3794 , 48.5
150～200万円未満		307 , 3.9	専門学校		1306 , 16.7
200～250万円未満		410 , 5.2	わからない		1246 , 15.9
250～300万円未満		584 , 7.5	問15-1 自分のことが好きか	7815	
300～400万円未満		1230 , 15.7	好きである		1898 , 24.3
400～500万円未満		1375 , 17.6	どちらかといえば好きである		3607 , 46.2
500～600万円未満		1209 , 15.5	どちらかといえば好きではない		1619 , 20.7
600～700万円未満		758 , 9.7	好きではない		691 , 8.8
700～800万円未満		513 , 6.6	問15-2 大人は信頼できるか	7815	
800～900万円未満		278 , 3.6	そう思う		2762 , 35.3
900～1,000万円未満		157 , 2.0	どちらかといえばそう思う		3731 , 47.7
1,000万円以上		343 , 4.4	どちらかといえばそう思わない		926 , 11.8
問4-1 保護者の最終学歴（母親）	7815		そう思わない		396 , 5.1
中学校卒業（高校中退含む）		228 , 2.9	問15-3 将来の夢や目標	7815	
高等学校卒業		2665 , 34.1	持っている		4498 , 57.6
高専・短大・専門学校卒業		3552 , 45.5	なんとなく持っている		2171 , 27.8
大学卒業（大学院含む）		982 , 12.6	持っていない		547 , 7.0
その他の教育機関卒業		23 , 0.3	わからない		599 , 7.7
答えたくない/不明		365 , 4.7	問15-4 現在の頑張る気力	7815	
問4-2 保護者の最終学歴（父親）	7815		そう思う		4742 , 60.7
中学校卒業（高校中退含む）		291 , 3.7	どちらかといえばそう思う		2348 , 30.0
高等学校卒業		2322 , 29.7	そう思わない		218 , 2.8
高専・短大・専門学校卒業		1208 , 15.5	わからない		507 , 6.5
大学卒業（大学院含む）		2612 , 33.4	問16-1 悩みがある	7815	
その他の教育機関卒業		22 , 0.3	問16-2 悩みの内容	2453	359 , 14.6
答えたくない/不明		1360 , 17.4	おうちのこと	2453	1281 , 52.2
問9-1 必要とする食糧を買えなかった	7815	528 , 6.8	学校や勉強のこと	2453	354 , 14.4
問9-2 必要とする衣服を買えなかった	7815	862 , 11.0	クラブ活動のこと	2453	567 , 23.1
問9-3 電気・ガス・水道料金の未払い	7815	690 , 8.8	自分のこと	2453	1081 , 44.1
問9-4 家賃やローンの未払い	7815	631 , 8.1	友達のこと	2453	390 , 15.9
問9-5 医療機関への受診ができなかった	7815	565 , 7.2	好きな人のこと	2453	829 , 33.8
問10 暮らしの状況	7815		進学・進路のこと	2453	254 , 10.4
大変ゆとりがある		148 , 1.9	問17 悩みを相談する相手		
ややゆとりがある		742 , 9.5	家族の大人の人	7815	5117 , 65.5
普通		3877 , 49.6	きょうだい	7815	1451 , 18.6
やや苦しい		2380 , 30.5	学校の友達	7815	4448 , 56.9
大変苦しい		668 , 8.5	学校以外の友達	7815	693 , 8.9
問12-1 進学についての希望	7815		学校の先生	7815	1987 , 25.4
中学校		10 , 0.1	近所の大人の人	7815	69 , 0.9
高校		1298 , 16.6	インターネットへの書き込み	7815	63 , 0.8
短期大学		530 , 6.8	電話相談	7815	50 , 0.6
大学・大学院		4125 , 52.8			

専門学校・高等専門学校	916 , 11.7	学習塾や習い事の先生	7815	269 , 3.4
わからない	852 , 10.9	その他	7815	132 , 1.7
問14 お子さんの健康状態	7815	特にいない	7815	433 , 5.5
良い	5765 , 73.8	誰にも相談したくない	7815	591 , 7.6
どちらかといえば良い	891 , 11.4			
普通	1040 , 13.3			
どちらかといえば良くない	104 , 1.3			
良くない	15 , 0.2			

データ表示：n %

表 2. 教育アスピレーションに影響を与える因子

	教育アスピレーションが高い		
	OR	95% CI	P-value
貧困関連設問			
相対的貧困			
相対的貧困	0.926	0.780 , 1.098	0.375
非相対的貧困	1.000	ref	
問9-1 必要とする食糧を買えなかった			
あった	0.819	0.649 , 1.033	0.091
なかった or 該当しない	1.000	ref	
問9-2 必要とする衣服を買えなかった			
あった	0.875	0.724 , 1.057	0.166
なかった or 該当しない	1.000	ref	
問9-3 電気・ガス・水道料金の未払い			
あった	0.863	0.685 , 1.088	0.213
なかった or 該当しない	1.000	ref	
問9-4 家賃やローンの未払い			
あった	0.822	0.664 , 1.016	0.070
なかった or 該当しない	1.000	ref	
問9-5 医療機関への受診ができなかった			
あった	0.790	0.633 , 0.985	0.037
なかった or 該当しない	1.000	ref	
問10 暮らしの状況 (貧困感)			
大変苦しい	0.927	0.751 , 1.144	0.481
大変苦しい以外	1.000	ref	
児童への設問			
問10 普段の勉強時間			
全くしない	0.514	0.318 , 0.830	0.006
30分より少ない	0.565	0.423 , 0.754	<0.001
30～1	0.729	0.626 , 0.849	<0.001
1～2	1.000	ref	
2～3	1.002	0.854 , 1.177	0.978
3以上	0.990	0.782 , 1.253	0.931
問15-1 自分のことが好きですか？			
好きである	1.000	ref	
どちらかといえば好きである	0.954	0.823 , 1.106	0.535
どちらかといえば好きではない	0.808	0.675 , 0.967	0.020
好きではない	0.762	0.599 , 0.969	0.027
問15-2 大人は信頼できるか			
そう思う	1.000	ref	
どちらかといえばそう思う	0.848	0.742 , 0.969	0.015
どちらかといえばそう思わない	0.744	0.607 , 0.912	0.004
そう思わない	0.743	0.553 , 1.000	0.049
問15-3 将来の夢や目標			
持っている	1.000	ref	
なんとなく持っている	1.081	0.940 , 1.243	0.277
持っていない	1.106	0.855 , 1.431	0.441
わからない	1.262	0.960 , 1.658	0.095
問15-4 現在の頑張る気力 (頑張りたいか)			
そう思う	1.000	ref	
どちらかといえばそう思う	0.919	0.805 , 1.050	0.215
そう思わない	0.428	0.293 , 0.625	<0.001
わからない	0.819	0.606 , 1.108	0.196

OR：オッズ比, 95% CI：95%信頼区間, ref：参照基準

教育アスピレーション：大学・大学院希望 = 1, それ以外 = 0.

調整因子：学年、ひとり親世帯 (保護者 問2-3)、親の学歴 (保護者 問4)、子どもの健康状態 (保護者への問14)、親の子どもへの進学希望 (保護者 問12)、子どもの勉強理解度 (児童 問11)

表3. 相対的貧困群における自己肯定感との関連解析

	n	否定的群	n	肯定的群	P-value
問15-1 自分のことは好きですか					
問15-2 大人は信用できるか	555		1032		<0.001
そう思う		94 , 16.9		444 , 43.0	
どちらかといえばそう思う		268 , 48.3		471 , 45.6	
どちらかといえばそう思わない		126 , 22.7		86 , 8.3	
そう思わない		67 , 12.1		31 , 3.0	
問15-3 将来の夢や目標	555		1032		<0.001
持っている		94 , 16.9		444 , 43.0	
なんとなく持っている		268 , 48.3		471 , 45.6	
持っていない		126 , 22.7		86 , 8.3	
わからない		67 , 12.1		31 , 3.0	
問15-4 今、頑張りたいか	555		1032		<0.001
そう思う		260 , 46.8		662 , 64.1	
どちらかといえばそう思う		214 , 38.6		284 , 27.5	
そう思わない		29 , 5.2		21 , 2.0	
わからない		52 , 9.4		65 , 6.3	
問16-1 悩みの有無	555		1032		<0.001
ある		263 , 47.4		280 , 27.1	
ない		292 , 52.6		752 , 72.9	
問16-2 悩みの内容					
おうちのこと	263	48 , 18.3	280	39 , 13.9	0.206
学校や勉強のこと	263	165 , 62.7	280	131 , 46.8	<0.001
クラブ活動のこと	263	40 , 15.2	280	33 , 11.8	0.284
自分のこと	263	88 , 33.5	280	37 , 13.2	<0.001
友達のこと	263	122 , 46.4	280	120 , 42.9	0.544
好きな人のこと	263	39 , 14.8	280	42 , 15.0	0.872
進学・進路のこと	263	87 , 33.1	280	70 , 25.0	0.055
その他のこと	263	27 , 10.3	280	34 , 12.1	0.434
問17 悩みを相談する相手					
家族の大人の人	555	276 , 49.7	1032	705 , 68.3	<0.001
きょうだい	555	87 , 15.7	1036	193 , 18.7	0.132
学校の友達	555	291 , 52.4	1036	568 , 55.0	0.320
学校以外の友達	555	50 , 9.0	1036	73 , 7.1	0.169
学校の先生	555	95 , 17.1	1036	296 , 28.7	<0.001
近所の大人の人	555	4 , 0.7	1036	12 , 1.2	0.401
インターネットへの書き込み	555	6 , 1.1	1036	7 , 0.7	0.396
電話相談	555	3 , 0.5	1036	5 , 0.5	0.880
学習塾や習い事の先生	555	10 , 1.8	1036	26 , 2.5	0.360
その他	555	15 , 2.7	1036	23 , 2.2	0.556
特にいない	555	46 , 8.3	1036	56 , 5.4	0.027
誰にも相談したくない	555	71 , 12.8	1036	44 , 4.3	<0.001

データ表示: n, %. P-value: カイ二乗検定.

肯定的群: 問15-1 「自分のことが好きですか」に対し「好きである」または「どちらかといえば好きである」と回答。

否定的群: 問15-1 「自分のことが好きですか」に対し「好きではない」または「どちらかといえば好きではない」と回答。

IV. 考 察

教育アスピレーションに直接的に影響を与える貧困経験エピソードとして「医療機関への未受診」が確認された。さらに、自己肯定感の向上によって教育アスピレーションが改善する可能性が示された。

教育アスピレーションと経済的な貧困の関係性について、所得基準を対象として親の学歴で補正をかけて分析したところ、教育アスピレーションへの直接的な影響は認められなかった¹¹⁾。しかし、「医療機関への未受診」という具体的なエピソードは、交絡要因補正下においても有意に教育アスピレーションの低下に影響していることを認めた。この点については、国民皆健康保険制度の充実から他国より医療機関を受診しや

すい環境が整備されている日本においても、子ども自身が健康状態に変化があると感じられる場合に、貧困のために受診行動が制限される事態が発生していることが報告されており^{13, 14)}、大規模自治体データを用いた実証研究でも子どもの医療費助成制度の受診抑制に対する貧困の影響が述べられている¹³⁾。実際、将来的に4年制の大学への進学率と医療機関への受診率とに関連性があるという報告もあり¹⁵⁾、本研究にて得られた小学生・中学生時代における医療未受診と教育アスピレーションとの関連が、将来的な進学率にも影響を与えていると考えられている。経済的貧困に由来し、なおかつ教育アスピレーションに対して負の相関をもつ因子が支配的であれば、当然ながら経済的貧困

も有意な負の相関を示すはずである。しかし、経済的貧困において医療の受診率の低さは支配的ではない。この点については、多重共線性によって引き起こされている可能性がある。また、人生で感銘を受けた出来事や興味を引く仕事など遭遇した大人の社会活動に影響される子どもの特性から説明を試みると、医療の受診率の低さが大人や社会に触れる機会の少なさを加热的に示している可能性も否定できない。なお、医療機関の未受診というエピソードは教育アスピレーションと負の相関関係にあるが、選択肢が限定的であったため、教育アスピレーションに直接的な影響を与える因子を見落としているとも考えられる。そのため、医療機関の未受診を含めて貧困経験エピソードを細分化し、教育アスピレーションに影響を及ぼしている因子を明らかにする必要がある。

次に、本研究では「学習時間」の延長が教育アスピレーション向上に向けた子どもへの支援目標の1つとなる可能性を認めた。子ども時代の学習習慣が将来的な進学率等につながるという結果は、日本においても報告されている^{10, 16)}。また、小学生・中学生時代における「自己肯定感」が教育アスピレーション向上に影響を有することも確認された。学生時代における自己肯定感や自尊感情が、学習意欲や教育アスピレーションに影響を及ぼすという報告も日本において報告されており¹⁷⁻¹⁹⁾、今回得られたこれらの結果は妥当であると考えられる。

一方で、本研究では、相対的貧困群における自己肯定感が低い群では「悩み」を有している子どもが多く、「学校や勉強のこと」や「進学・進路のこと」が上位であった。この結果は、教育アスピレーションが低い状態にある自己肯定感が低い小学生・中学生の子どものうち、一定数が学習に対する悩みを保持しており、学習の意欲につながる因子を持ち合わせていることを示している。よって、小学生・中学生という年代であれば、学習の悩みを解消することによる成功体験が自己肯定感の低さを改善し、将来的な教育アスピレーションを向上させる可能性がある。

なお、学習の悩みを回復させる手段として、日本では協同学習や生徒指導方法の見直しといった観点から自己肯定感回復を目指した取り組みが実施、報告されている^{20, 21)}。また、日本では学生相談室などの環境が用意されているが、依然、悩みを抱えていながら相談には来ない学生が一定数いるとする報告もある²²⁾。本研究の自己肯定感が低い群に属する子どもも悩みを抱え込む傾向が強く、現行の制度では支援が届いていないと判断できる。これは国外においても同様で、相談しやすい環境の整備自体の重要性が示唆されており²³⁾、学習に対する指導方法を見直すばかりではなく、そこ

からつながる学習状況の悩みを解決する場合や、悩みが相談しやすい環境の整備が重要であると考えられている。インターネット環境が発展した現在においては、スマートフォンなどを活用したワールドワイドウェブ上による学生相談システムの展開なども期待される。

本研究は、横断的なアンケート形式での調査である点に研究限界があるため、今後縦断的な研究によって因子間の因果関係の評価や、自己肯定感向上に向けた悩み解決の場の充実による教育アスピレーションの改善効果の検証が求められる。また、個人情報保護の観点から、交絡要因として先行研究であげられている児童の性別¹¹⁾についての調査ができなかった。

以上の考察から、小学生・中学生の子どもにとって「医療機関への未受診」に関わる因子が、教育アスピレーションに直接影響を与えることが示された。ただし、アンケート調査で詳細に触れることができなかった社会との関わりなど他の因子の調査を要する点には留意が必要である。また、教育アスピレーションの向上に対して自己肯定感の向上は好影響であり、学習意欲を失われていない小学生・中学生にとって、非常に重要な要因であることが認められた。

謝 辞

本研究を行うにあたりご協力くださいました関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) 厚生労働省：国民生活基礎調査の概。2018 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html>。(参照 2020-10-11)
- 2) OECD：OECD Family Database, data for chart CO2.2.A, OECD Income Distribution Database. 2017
- 3) 小田川花子：家賃負担が子どもの生活に与える影響。社会政策 11：139-150, 2019
- 4) 内閣府：令和3年度 貧困状態の子供の支援のための教育・福祉等データ連携・活用に向けた調査研究報告書。2022
- 5) Arif N, Peter S：Poverty and Education in South Asia. Handbook of Education Systems in South Asia：1-23, 2020
- 6) Patricia M, Andrew H, Lisa A. Passports out of poverty: Raising access to higher education for care leavers in Australia. Child Youth Serv Rev 97：85-93, 2019
- 7) 道中隆：生活経済政策－(特集)都市の下層社会「保

- 護受給層の様相－保護受給世帯における貧困の固定化と世代的連鎖」. 生活経済政策研究所 543(127): 14-20, 2007
- 8) 宮武正明: 貧困の連鎖と学習支援－生活困難な過程の児童の学習支援はなぜ大切か (2)－. こども教育宝仙大学紀要 4: 109-120, 2013
- 9) 相澤真一: 教育アスピレーションからみる現代日本の教育の格差. 現代の階層社会 [2]－階層の移動と構造: 123-138, 2001
- 10) 荒牧草平: 現代高校生の学習意欲と進路希望の形成－出身階層と価値志向の効果に注目して－. 教育社会学研究 71: 5-23, 2011
- 11) 平沢和司: 子どもの理想学歴と家庭環境. 平成 23 年度 親と子の生活意識に関する調査: 210-217, 2012
- 12) 厚生労働省: 2009 年 10 月 相対的貧困率の公表について. <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2009/10/h1020-3.html> (参照 2020-10-11)
- 13) 阿部彩: 誰が受診を控えているのか J-SHINE を使った初期的分析. <https://hdl.handle.net/10086/25596> (参照 2020-10-11)
- 14) 五十嵐隆. 保健・医療面から見た子どもの貧困. 日本家政学会誌 2018; 69 (11): 775-778.
- 15) 青木幸子, 大竹美登利, 長田光子他: 貧困と向き合う家庭科教育－高校生の日常生活を対象としたアンケート調査結果から－. 日本家庭科教育学会誌 59 (4): 218-227, 2017
- 16) 藤村正司: 大学進学における所得格差と高等教育政策の可能性. 教育社会学研究 85: 27-48, 2009
- 17) 田島賢侍, 奥住秀之: 障害・疾病・不登校などのある児・者を対象にした自尊感情・自己肯定感の文献検討. 東京学芸大学紀要 65 (2): 283-302, 2014
- 18) 清水美緒, 橘川真彦: 小学校高学年における学習意欲に影響を及ぼす要因. 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 32: 117-124, 2009
- 19) 久芳美恵子, 齋藤真沙美, 小林正幸: 小, 中, 高校生の自己肯定感に関する研究. 東京女子体育大学・東京女子帯域短期大学紀要 42: 51-60, 2009
- 20) 郭芳, 田中弘美, 任セア, 史邁: 子どもの自己肯定感に及ぼす影響要因に関する実証研究－京都子ども調査をもとに－. 評論・社会科学 126: 15-32, 2018
- 21) 市毛正仁: 生徒指導における今日の課題と次代への方向性 (児童・生徒を取り巻く環境変化の視点からの考察). 北里大学教職課程センター教育研究 2: 69-84, 2016
- 22) 独立行政法人日本学生支援機構: 大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査 2018 http://www.jasso.go.jp/sp/about/statistics/torikumi_chosa/_icsFiles/afiedfile/2018/11/29/1_kekka.pdf (参照 2022-3-31)
- 23) Kelley F: Child welfare involvement and contexts of poverty: The role of parental adversities, social networks, and social services. Children and Youth Services Review 72: 5-13, 2016

Children's Experiences of Poverty and its Impact on Educational Aspirations

Tomohisa Fukunaga

Department of Nursing, Faculty of Nursing and Nutrition,
Kagoshima Immaculate Heart University

Keywords: Child poverty, educational aspirations, feelings of self-affirmation in children, measures to combat poverty

Abstract

Social problems in contemporary Japan include widening social inequality and increasing number of individuals experiencing poverty. Child poverty is an issue of particular urgency and is one of the factors that prevents individuals from breaking out of a spiral of poverty. Existing research suggests that child poverty may be more strongly influenced by parents being unable to foster a sense of educational aspiration in their children than by economic poverty. This study analyzed effects on educational aspiration with a focus on how poverty is actually experienced and felt by participants, based on responses to a questionnaire survey administered to children in the fifth grade of elementary school and the second grade of junior high school, including parents of these children. Results indicated that educational aspirations were not significantly affected by income-based poverty (as defined by the Cabinet Office), whereas children who had not received medical attention when they were unwell were found to have significantly reduced educational aspirations. In addition, "feelings of self-affirmation" were found to be significantly correlated with educational aspirations, and "trust in adults" was strongly related as a factor contributing to feelings of self-affirmation among respondents who were experiencing poverty.

For children at elementary and junior high school, failing to receive medical attention when they are unwell is an experience that directly impacts their educational aspirations. This propels the need for effective measures to combat child poverty, which include providing a suitable environment in terms of medical care and ensuring that information regarding available medical services is well-disseminated and accessible. Furthermore, to improve the educational aspirations of children in poverty, it is important to create spaces where such children can find support for the difficulties that they are experiencing and to provide a social environment that makes it easy for them to seek support.
